Ⅳ 額田部地区の指定文化財

額田部地区はさほど広い地域ではないが，下表のとおり10件もの指定文化財が存在する。とりわけ，額安寺が所蔵する彫刻等が大部を占め，額田寺伽藍並条里図も旧蔵していたことと相俟って，その重要性が再確認させられる。これらは，額田寺の成立と盛衰，中世律宗の宗教活動や地域信仰のありかたを考える上で重要であり，額田部の地域性を考える上で看過できない資料となっている。

近年，額安寺五輪塔，黒漆六角厨子，木造文殊菩薩騎獅像（西町）などの解体保存修理が行われ，新たな知見を得たところも多い。

また，未指定ではあるが，額安寺文書は古代から中近世に及ぶ文書群で，備前国金岡東庄関係文書や板屋瀬関係文書などを含む重要な史料群である。

額田部地区の指定文化財（国・県・市）

指定区分	種別	名称・員数	指定年月日	所有者
重要文化財	彫刻	木造文殊菩薩騎獅像　1軀	明42.9.21 昭43.2.2（名称変更）	額安寺
重要文化財	彫刻	乾漆虚空蔵菩薩半跏像　1軀	明43.4.20	額安寺
重要文化財	彫刻	木造伝善導大師坐像　1軀	大11.4.13	光明寺
重要文化財	彫刻	木造阿弥陀如来及両脇侍立像　3軀	大11.4.13	光明寺
重要文化財	建造物	額安寺五輪塔　8基 石造五輪塔（8基） 永仁五季七月八日の刻銘があるもの 1 永仁五年十月五日の刻銘があるもの 1	昭36.3.23	額安寺
重要文化財	考古資料	大和額安寺五輪塔納置品 一，銅骨蔵器 嘉元元年八月日良観上人舎利瓶記刻銘 附　鍍銀骨蔵器　四合 銅骨蔵器　一合 金銅五輪塔　二基 （以上第1塔納置品） 一，瀬戸灰釉印花文壺　一合 （以上第1塔関連品） 一，金銅骨蔵器　一合 嘉暦元年八月十日善願上人舎利瓶記刻銘 附　銅骨蔵器　一合 嘉暦元年九月四日観恵房在銘 （以上第2塔納置品）	昭58.6.6	額安寺
史跡名勝天然記念物	史跡	額田部窯址	昭4.4.2	大和郡山市
県指定文化財	工芸品	黒漆六角厨子　1基 基壇裏面に正和五年大工正光等の墨書銘がある	平1.3.10	額安寺
県指定文化財	彫刻	木造文殊菩薩騎獅像　1軀 附　文殊菩薩印仏　671枚	平4.3.6	西町自治会
市指定文化財	建造物	額安寺宝篋印塔　1基	昭53.4.20	額安寺

乾漆虚空蔵菩薩半跏像

右手を屈して蓮華茎をとり，左手を膝上で与願印とし蓮華座の上に左足を踏み降ろして坐す姿である。像高51.5cm。胸には瓔珞を付け，上半身に条帛をまとう。やや胴の細い体軀のつくりや，柔らかく粘塑的な両膝の衣襞，胸飾りの唐草の形式などには奈良時代の特徴が認められるが，面部に生気が欠け，肉づけが平板で衣文にも張りがない。頭・体部の心木を前後2材からあわせ，表面を乾漆で整えた木心乾漆造りである。左足と両腕は別材を用いる。持物，宝冠，光背は後補である。求聞持法の経典からみると，左右の印相，持物が逆になる。台座の上框に墨書銘があり，求聞持法を日本に伝えた道慈律師の護持仏であったが，損傷，彩色の剝落が進んだため西大寺律僧叡尊が仏師の善春や絵師の明澄らに補修させ，宝冠，光背を補作し，本体にも彩色を加え，弘安5年（1282）11月2日に開眼供養を行なったことが記されている。現存する虚空蔵菩薩像の作例としては最古のものであり，奈良時代末ごろの制作年代が推定されている。

写真1　乾漆虚空蔵菩薩半跏像

木造文殊菩薩騎獅像

上半身が裸形で，右手に剣，左手に経巻をとり，獅子の背に置かれた蓮華座上に結跏趺坐する。天衣は両肩を覆い，内側にたらす。両膝部の裳には襞数の多いしのぎ立ったかなり強い衣文を刻んでいる。一木造りで内刳りは施されていない。像高は31.8cm。細く切れ長の眼や，細く筋の通った鼻，小さく上品な唇など，面相は穏やかでよく整っているが，体軀に比して頭部がやや大きいきらいがある。獅子は宋風の獅子ではなく，鼻が小さく面相の穏やかな犬のようである。騎獅文殊としては禅定寺像，清涼寺像と並ぶ古作の一つで，このスタイルが伝統的様式となり，鎌倉時代以降も踏襲されていく。10世紀末～11世紀初頭ごろの作と推定される。

写真2　木造文殊菩薩騎獅像

木造伝善導大師坐像

寺伝で善導大師像と伝えられる。善導（613～681）は唐代の高僧で，中国浄土教の大成者と言われている。国内で作られた善導の画像などは称名念仏の造形化として，合掌して口から6体の阿弥陀如来の化仏を出している形式のものが多い。本像は禅宗の祖師像に多い形式をとり，右手に払子をもって椅子上に坐し，両袖を椅子から大きく左右に垂らしている。したがって，善導像として刻まれたものかどうかは疑問視する見解が強い。

寄木造り，玉眼嵌入の像で，像高は34.8cm。法衣や袈裟の襞が自由に乱れ形式化していないのが特徴である。鎌倉時代末ごろの作と推定されている。

写真3　木造伝善導大師坐像

木造阿弥陀如来及両脇侍立像

木造，金泥，切金文様，像高 中尊77.2cm，観音49.3cm，勢至50.5cm

寄木造り，玉眼嵌入の像で，台座も当初のものと思われる。

中尊の大粒の螺髪や下ぶくれで抑揚の乏しい両頬の肉どり，俗っぽい目鼻立ちなどは，室町時代の作風を示している。

金泥像であるが，三尊とも細かい切金文様を施しており，丁寧な仕上げとする。

写真４　木造阿弥陀如来及両脇侍立像

額安寺五輪塔

額安寺境内の北約400mの丘陵地裾部に所在。俗称「鎌倉墓」ともいい，源頼朝，二位禅尼等の廟塔との口伝もあった。

8基の五輪塔は敷地の西側に東面して5基，北側に南面して3基が鍵の手に並んでいる。内，2基に永仁5年（1297）の刻銘があり，このころに造立されたものと考えられていた。額安寺所蔵の寛永11年（1634）の境内古絵図では現況と異なった配置で描かれており問題となっていたが，修理工事に伴う地下調査によって，南端の大型五輪塔のみが原位置を保ち，他の7基は江戸中期以降にこの場所に移設されたことが判明した。総高約2.9mを測る大型五輪塔は，地下調査によって出土した骨蔵器の銘文から忍性塔であることが確認された。南から2番目の塔の地輪底部の納置孔からは鎌倉極楽寺の善願上人，弟子の観恵房の骨蔵器が検出されている。

8基ともに地輪の高さが低く，横張の水輪の曲形，隅で力強く反り上がる火輪の軒反りなどに鎌倉後期の特色をよく示している。

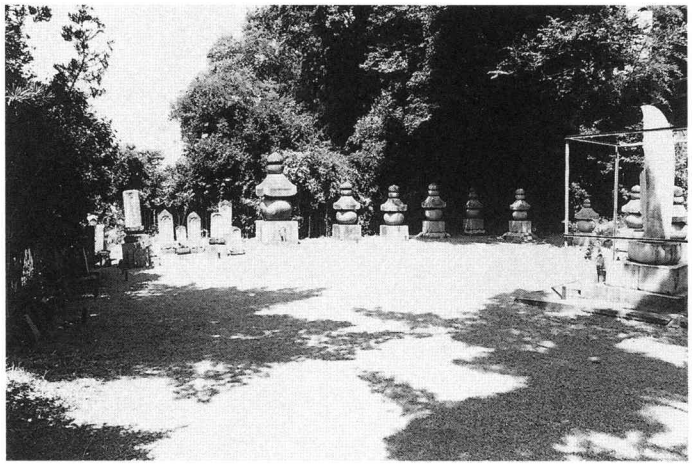

写真5　全景（南東から）

写真6　忍性塔

大和額安寺五輪塔納置品

額安寺五輪塔の第一塔と第二塔の地下調査で発見された骨蔵器を中心とする納置品一括資料。第一塔は良観上人（忍性），第二塔は善願上人（順忍）の墓である。

良観上人舎利瓶記の刻銘をもつ銅鋳造製の骨蔵器は，高さ約29cmで，蓋，体部，体部受部，台座の4つの部分から構成され，鑞付け，笠鋲によるかしめ技法などによって接合されている。宝珠つまみを有する蓋の上面には八葉花座が，台座には反花が鋳出される。鎌倉時代に主流をなした南都の布薩会に用いられた布薩形水瓶に酷似している。銘文は体部全体に24行にわたり刻される。

善願上人銘の金銅製骨蔵器は円筒形で，高さ約14cm，筒部径約6.5cmを測る。蓋は被せ蓋式で，上部が伏椀状に盛り上がる。蓋表にも4行の銘文が刻される。筒身の表面に13行の銘文が線刻される。その他，第一塔の納入品3点と土坑から出土した瀬戸灰釉印花文壺，第二塔から出土した良観の弟子である観恵房の骨蔵器なども指定物件とされている。中世高僧の葬制や当時の金工技術を知る上で貴重な資料である。

写真7　銅骨蔵器（良観上人舎利瓶記刻銘）

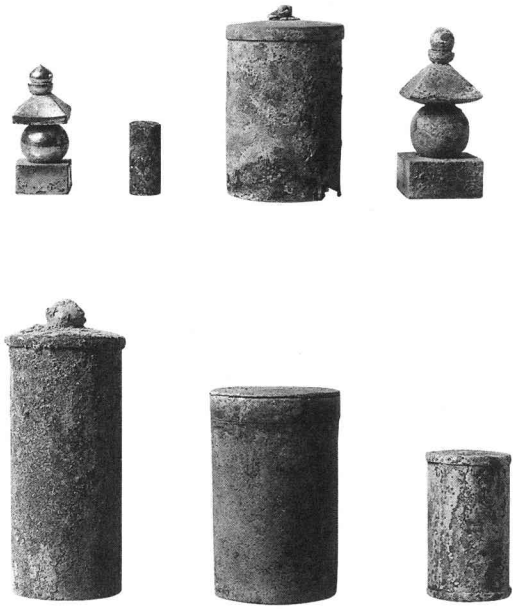

写真8　第一塔納置品

額田部窯跡

額安寺五輪塔群の西側で，1928年（昭和3）に用水池の掘削に伴って発見された窯跡群。小規模な平窯が全部で3基検出され，現在西側の1基が覆屋を架け露出保存されている。3基の窯はほぼ同形同大で，約3mの間隔をあけて東西に並んでいる。丘陵の裾部斜面を利用した半地下式の平窯で，炊口を南に向ける。焼成室は長さ約1.3m，幅約1m，残存高約50cmで，床面には3条の細長いロストルを配する。燃焼室と焼成室の境に設けられた隔壁の下方には4個の方形の通炎孔が開けられる。火道は前後で約20cmの勾配があり，燃焼室の床面はさらに急勾配となっている。

出土遺物は，少量の瓦類と土器片であるが，鎌倉時代の瓦と考えられている。叡尊，忍性が活躍した額安寺の中興に際してその所用瓦を焼成したものと推定されている。

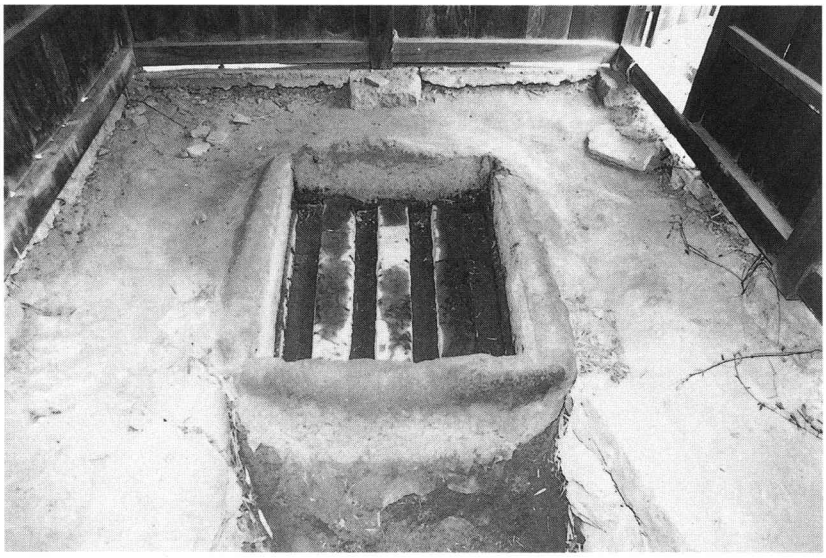

写真9　窯跡全景
（南から）

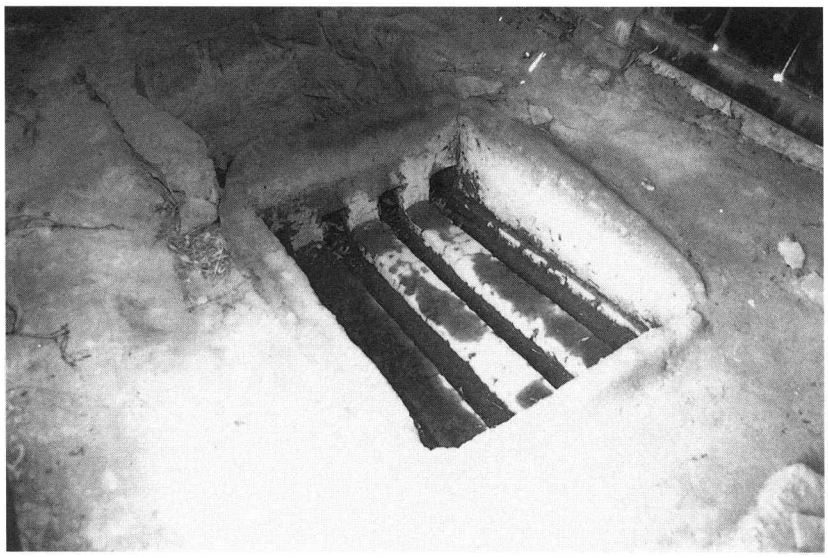

写真10　窯跡全景
（北東から）

黒漆六角厨子

厨子は平面横長六角形とし，木造（檜材），錆下地，布着せ，黒漆塗である。屋蓋部が大きく損傷し，軸部も左右の扉と下框を亡失するものの，内法長押の上に横盲連子をいれ，腰長押の下方に格狭間を配する主要部は当初の繊細な均整のとれた形態をよく残している。背面を除く5方の扉口には方立を立て，鴨居，石当りを入れる。正面は両開きである。屋根は照り起りのある六角形の板屋根で反りをつくり，上端にしのぎを立てる。格狭間の繰形や猪目透八双金具の蝶番も形が整い，宝相華の毛彫りは繊細なつくりである。基壇とは構造・作風が異なり，鎌倉時代中葉の作と推定される。高132.4cm。基壇も木造（檜材），錆下地，布着せ，黒漆塗である。平面を横長六角形とし，地覆，反花，框の3段を組み束立とする。上部も同じ収まりである。裏面に「正和五年」，「大工正光」等の墨書があり，基壇は正和5年（1316）の作であることが知れる。

鎌倉時代の六角厨子の遺例は法隆寺及び藤田美術館例の2基があるが，類例が少なく工芸史上その価値は高い。平成2～3年にかけて解体修理が行われている。

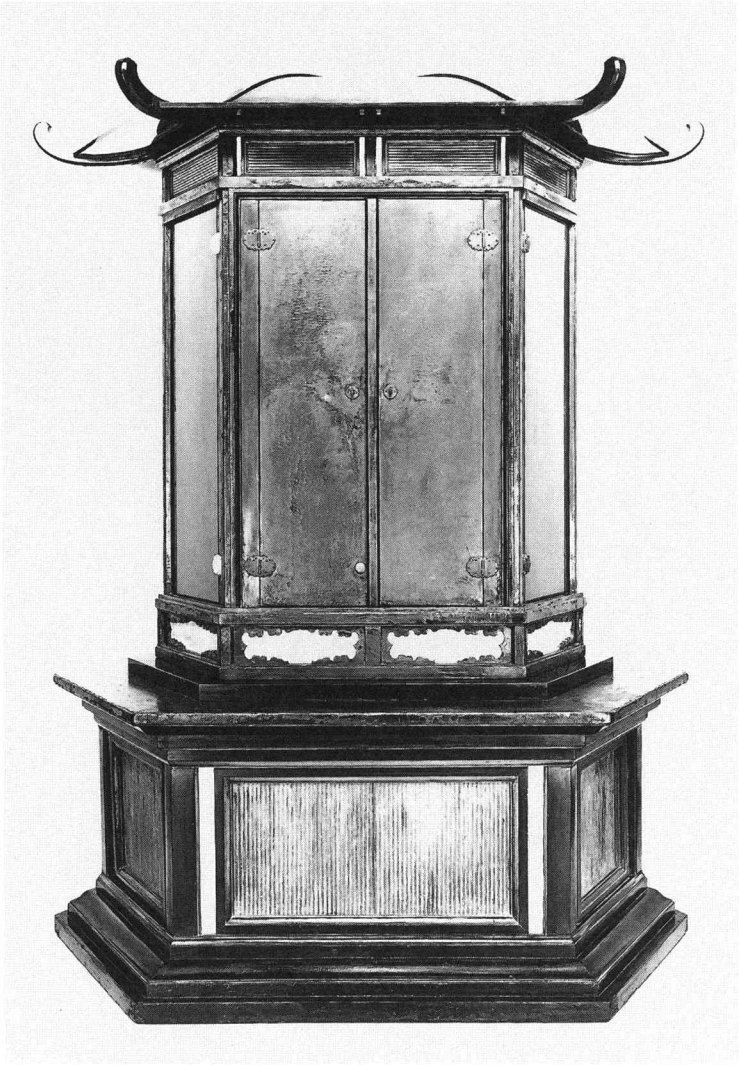

写真11　黒漆六角厨子

木造文殊菩薩騎獅像

上半身は裸形で，右手に剣（後補），左手に蓮華茎をもつ姿で，天衣は両肩を覆い，両腕の内側に垂らす。檜材の寄木造りで，錆下地漆塗，白土下地，粉溜，切金，像高38.4cm。寄木は細かく，肉身部を粉溜とし，着衣に切金文様を施して入念に仕上る。頭部は挿首，体部は腰上までを前後に剝ぎ，内刳りを施し，マチ材をはさむ構造である。頭体部は均斉がとれ，目鼻立ちは端正でまとまりのよさと落ち着きのある趣を呈している。温和な眼差しは当時活躍した慶派仏師の感覚とは異なり，善派仏師のひとり善円の作風に通じるところがある。13世紀前半に作られたものである。

獅子像は後補の厚い彩色で覆われていたが，蓮華座とともに本体と同作である。獅子像内には671枚もの印仏が納入されていた。裏面に結縁者の名が一紙ごとに墨書されており，南都における鎌倉時代初期の文殊信仰の性格を知ることができる。

平成4～5年に印仏の修理が，平成5～7年にかけて文殊菩薩像と獅子像の修理が行われた。

写真12　文殊菩薩像

写真13　獅子像

額安寺宝篋印塔

現在は額安寺の東南側にある径30mほどの通称明星池の中島に立っている。もとはこの明星池の北堤付近から出土したと伝えられている。総高2.84m，花崗岩製。8個の石材を組み合わせたもの。基礎の高さは低く，古様を呈する。側面を2区に分かち輪郭を巻き，格狭間を飾る。東面の2面に「文応元年 十月十五日 願主 永弘」，「大工大蔵 安清」の刻銘がある。塔身中央の月輪内に金剛界四方仏の種子を薬研彫りにする。笠部は下3段，上6段式で，隅飾りは一弧無地で直立する。相輪は1.02m，露盤の側面も2区とし格狭間をつくる。

細部にいたり精密な技巧を施し，各所に輪郭を巻き格狭間を飾り，背を高くするため段数を多くするなど，ひじょうに装飾的な造形となっている。年号は我が国で3番目に古く，また，大工大蔵安清は西大寺系石大工で，やがて大蔵氏系として一派をなす。文応6年（1260）は叡尊，忍性が活躍した額安寺の再興期にあたっており，律宗の活動とともに造塔が発達したことを示している。ただ，この特徴的な様式は畿内では普及せず，関東で発達し関東形式という地方色を生み出していく。

写真14　額安寺宝篋印塔

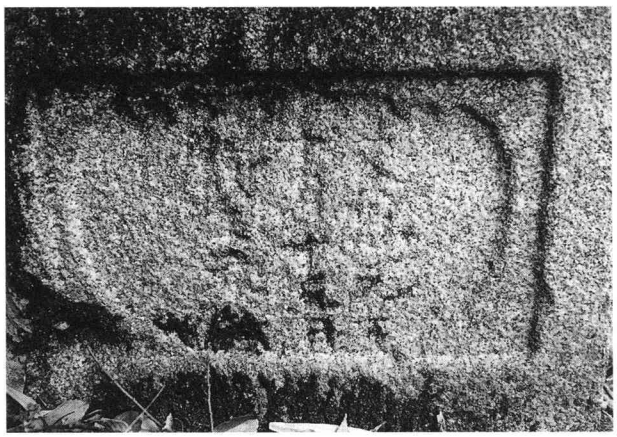

写真15　格狭間の銘文

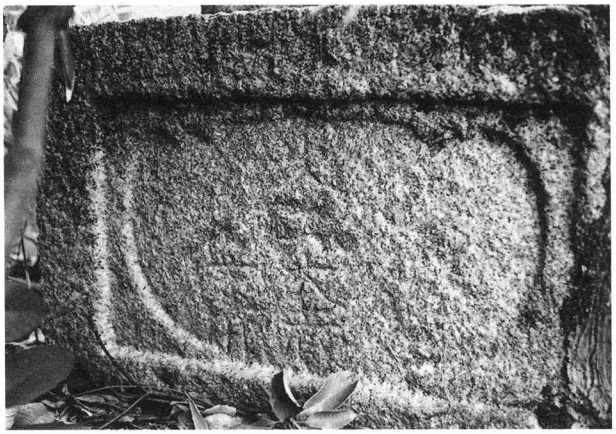

写真16　格狭間の銘文